

資料 2

滋賀県立琵琶湖博物館第三次中長期基本計画に
基づく令和3年度（2021年度）事業について

内部評価

令和4年（2022年）7月

内部評価 総評

（館長による評価）

第3次中長期計画を開始して1年が経過した。本計画は6つの事業と17の実施事業で構成されているが、計画10年後の「社会目標」に到達できるよう、新たに事業目標や実施事項をより明文化するとともに、計画5年後までの行程を作成した。その結果、今後の目標や進めるべきことがより明瞭となった。

この中長期計画を進めるために最も重要なことは、博物館の資源となる資料や情報、そこからもたらされる研究成果を蓄積することである。そのことが、その成果が展開される展示や交流事業の充実にもつながる。このためには、限られた時間の中で、できるだけ質の良い時間をつくることである。この点から、事業目標1に関連して、研究・事業専念日を厳格に運用する試行ができたことは今後の計画を進捗させるために重要な改善であった。

また、国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する電子ジャーナルの無料公開システム「J-stage」に博物館の研究報告書の登録が始まったことは、博物館の研究発信能力が拡大し、活用される機会が増加することになった。

事業目標4に関連して、YouTubeを活用した「びわこのちからチャンネル」や展示室でのスマートフォンを活用した「ポケット学芸員」が新たに導入され、琵琶湖の地域に興味を持つ人や展示を楽しむ事業が進展したことは評価できる。

事業目標5に関連して、キャッシュレスやチケットレスのシステムが導入できたことは、利用者に対する利便性が向上したが、発券業務には時間がかかっており今後の改善が必要である。

感染症が蔓延するなかでの中長期計画1年目となり、通常業務に加え、予約制導入を含む館内の感染症対策の実施、県庁で実施する感染症対策の応援など、負担が増加するなかで、ほぼ計画どおり、目標によっては前倒しで進めることができたことは、評価できる。今後、感染症の収束が進む中で、博物館内の充実だけではなく、地域の人々が出会い、学びあい、世界へ発信できる博物館となるような活動を着実に進めなくてはならない。

<p>【事業目標1】琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介 実施目標：琵琶湖やその周りの暮らしの価値を地域の人々や国内外の研究者とともに発見し、その魅力を国内外に広く発信します。</p>
<p>○内部評価</p> <p>2021年は館内外の研究プロジェクトがのべ85件進行中で、精力的に研究を進めた。館内の研究プロジェクトは、毎年度に研究審査委員会による審査を受け、その内容や計画についても助言を受けながら実施をしており、当年度もその上で研究を進めた。目玉となる総合研究は明治維新以降の150年間の変化を総括することを目的としているが、全体の進行がやや遅れており、一層の精進が必要となっている。もう一つの目玉となっている科研費による「琵琶湖固有種の成立過程の解明」に関する研究は順調に進んでおり、2022年度にまとめを行う予定である。これらの研究の後継となる新たな総合研究のテーマの検討は残念ながら進んでいない。</p> <p>重点事業1-2の研究成果の情報発信力の強化と1-3の研究環境の整備と活性化は、初動としては十分な進展があり、年度の目標は達成できた。</p> <p>全体としては2021年度は事業目標「琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介」を実現するための下ごしらえの年と位置付けられる。1-2と1-3については100%以上達成したが、1-1は半分程度しか達成しておらず、その改善が課題として残った。</p>
<p>各重点事業の目標と実施状況</p>
<p>1-1. 世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究の推進</p> <p>【実施状況】</p> <p>2020年3月に作成した工程表では、当館の総合研究や大型の科研費研究などの実施状況をもって「研究の推進」と位置付けていたが、中長期基本計画の重要な要素である「10年後の状態」に関する想定を欠くことから、館内の内部評価で方向性が誤っているのではないかという指摘があった。このため、本重点事業については根本から再検討を行っているところである。</p> <p>事業目標からあらためて10年後の状況(到達点)を次のように想定した</p> <ul style="list-style-type: none"> ・琵琶湖やその周りの暮らしの価値を発見する活動を地域が盛んに行っている ・琵琶湖が世界中の研究者の注目の的となり研究プロジェクトが次々に生まれている <p>こうした状況を生み出すための体制の整備や、さまざまな種まきが1-1の本旨と考え、2022年度に計画を再構築する。</p>
<p>1-2. 研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える</p> <p>【実施状況】琵琶湖博物館が提供する情報は当館内外の研究成果に基づいており、その緻密さや深さが面白さの源泉となっている。本重点事業は従来から行ってきた展示や書籍等を通じた成果の発信に加え、インターネットも利用してより広範囲の人々に発信を試みるものである。論文等の研究成果そのもので国内外の研究者の興味を引いて琵琶湖研究の厚みを増すとともに、一般の人向けに琵琶湖の情報を提供する「バーチャルミュージアム」の構築を企図している。 (次ページへ続きます)</p>

（事業目標1のつづき）

この準備として2021年は当館ウェブサイトの再構築を行い、利用者が入りやすい構造にするとともに、さまざまな情報提供のページが作れるように準備した。これにあわせて博物館の研究内容を紹介するページを加え、博物館を研究で利用する人や相談等で利用する人への便宜を図った。また、印刷物として配布していた当館の研究報告書を電子化(PDF化)し、国が主導する電子ジャーナルプラットフォーム J-Stage での公開を開始した。公開は2022年度を予定していたが、手続きが順調に進んだため前倒して2021年11月より公開が始まった。公開から3月までの5か月間で約4000件のアクセスがあり、従来に比べて格段に多くの人々が研究報告書を利用するようになった。

一般向けの情報発信としては、当館ウェブサイト上の既存の情報を「学べる・調べる」という枠組みで再整備した。また広報関係の事業としてユーチューブに弥生時代のコメの炊き方や氷魚の紹介の動画を公開し好評を得ている。

以上のように、情報発信の強化は順調にスタートを切ることができ、予定よりもやや早めに進行している。内容の充実については、今後の検討課題である。

1-3. 研究の質を高める環境の整備ならびに研究の活性化

【実施状況】開館から四半世紀が過ぎて劣化した建物や空調などの設備の更新と、時代遅れとなった研究機器の入れ替えを10年間で達成するのがこの事業の主要な目標である。2021年は主力となる大型研究備品の向こう5年間の調達計画を作って予算申請を行い、2022年度に電子顕微鏡を購入する予算を得た。電子顕微鏡は普通の顕微鏡より細部まで観察でき、種を判定して新種を発見したり、生物の移り変わりを調べるのに使われる。その他の細かい備品類についても更新計画も策定し、予算に計上した。このように2021年は再建の最初の段階として計画的な策定とその提示を行うことができ、初年度の目標を達成したと考えている。

研究時間の質の向上については、全員一律の研究専念日(時間)を設定した。館内で行ったアンケートでは、研究がやりやすくなったという肯定的な意見が大半を占める一方で、事業部の仕事へのしわ寄せや、緊急時の連絡方法の不備などの問題が明らかになった。

【事業目標2】 資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備

実施目標：貴重な標本・資料を将来にわたって人々が利用できるよう、適切な整理・保管を進めるとともに、ICTを活用した利用方法の開発により、琵琶湖博物館の知的資源を「だれでも・どこでも・いつでも」使えるように整備します。

○内部評価

保存されている資料・情報について、それを必要とする人が利用可能な管理を行うために資料登録などの整理作業をすすめた（年報 p4-7）。施設面では、四半世紀を経て、収蔵施設の老朽化が目立つようになってきたことから、安定的に資料・情報を保管する施設として、今後の必要な補修や改善について調査を行った。そのための予算獲得は今後の課題である。博物館で保管している資料・情報について、より多くの人びとに使用していただくことを推進するために、資料の内容がわかりやすいように画像情報でのデータベース公開のデータ作成作業をすすめた。

令和3年度は、多くの人々が使える資料・情報の保管と公開にむけて、保管環境の調査と整備計画を検討し、展示室での資料情報の発信を行い始めた段階である。現在の収蔵資料は、未整理資料も多く（年報 p4-7）、寄贈資料の受入も多くある（年報 p8）ことから、資料整理と資料の情報公開を着実に進めることが重要と考えている。

各重点事業の目標と実施状況

2-1. 標本・資料の管理体制の強化

【実施状況】 今後の年次計画作成の基盤となる過去の事故歴、照明の故障などを取りまとめることができた。民俗収蔵庫1の雨漏りの原因を特定し、修繕を行った。

2-2. 標本・資料の整理の推進と公開による利用促進

【実施状況】 緊急雇用を活用し、資料の写真撮影とデータベース登録が進展した。画像データベースの一部公開を実施できた。新たに考古資料データベースの構築をすすめ、公開のためのデータセットの作成を完了した。

2-3. ICTを利用し、だれでも・どこでも・いつでも使える博物館を創出

【実施状況】 写場にすでにある撮影機材（カメラ・レンズ・三脚）、照明機材（ライト・バックスクリーン）の内容を把握した。ウェブ図鑑構築に向けて足りない機材を確認し、次年度の購入計画を立てた。新たな音声ガイドシステム「ポケット学芸員」が導入できた。

【事業目標3】 みんなで学びあう博物館へ

実施目標：交流事業を知識や経験を交換し合う「学びあいの場」と位置づけ、さまざまな人々や組織と連携して充実を図るとともに、参加する人の相互の出会いが新たな活動につながる環境を創ります。

○内部評価

本年度は、提供している交流事業についての現状把握を行うことを重点においた。ニーズの多い交流事業についての調査と、新たな登録制度の必要性を検討するための他館の情報収集を行い、学校団体向けの体験型学習について、研修に参加した教員へのアンケートを行うなど、今後、多くの利用者が博物館の交流事業に参加していける仕組みや制度について、調査を実施した。

令和3年度は、今後の利用者が実施する交流事業やその展開を行っていくための交流事業の可能性について、検討を行うための調査を中心に行った。これについては計画どおり実施できたが、今後はそれに基づく検討と試験的な実施を進めていく必要がある。

各重点事業の目標と実施状況

3-1. 幅広いニーズに応える交流事業の充実

【実施状況】交流イベントや地域連携事業に関する集計を行った。その結果、定着型イベントの屋外実施や受付方法やオンラインの導入などの工夫により、交流イベントへの需要が例年より高かった。また講師として依頼されるという連携・提供型ニーズが依然と高いことなどの現状の把握ができた。

3-2. 出会いの場の創出

【実施状況】環境保全活動などに取り組んでいる市民環境団体、NPO、事業者などを「環境未来館登録団体」として登録し、活動紹介などを支援している「かごしま環境未来館」の登録制度の情報収集を行った。登録制度の要項、登録の条件・方法、登録団体（更新）申請書、宣誓書の様式、登録団体の支援内容の情報を収集した。

3-3. 「深く学ぶ力」に基づく琵琶湖学習の支援

【実施状況】昨年度までの取り組みを見直し、プランクトン観察実習やワークシートを使った展示見学等、学習を進める現場の教師の要望に沿った研修を行った。事後アンケートでは、事前事後学習をどのように行うかを教員自身が再構築することができたという声を聞くことができた。来年度は、教員と継続的に連携をとりながらより充実した琵琶湖学習ができるような支援を行う。

<p>【事業目標4】もっと使いやすい博物館へ 実施目標：琵琶湖を知る「入口」としての展示を、より使いやすく、常に成長する展示として発展させます</p>
<p>○内部評価</p> <p>各展示室において、最新情報を踏まえた展示更新を随時行い（年報 p31 - 37）、最新情報を踏まえた企画展示およびギャラリー展示の実施（年報 p41 - 51）、職員や地域の人による活動が来館者に見えるようにするため、オープンラボでの活動を推進した（年報 p38 - 41）。ICT の利用による展示室でのガイド「ポケット学芸員」の導入による展示に付随する情報へのアクセスの充実のための情報収集と、インターネット動画の配信によるフィールドへの誘いを進めた（年報 p93）。各展示室での今後の展示更新について担当から情報収集を行った。</p> <p>令和3年度は、展示をより使いやすくするための情報収集に重点をおき、ほぼ計画通りに実施できた。今後は、最新情報への更新計画とその実施や ICT を使った情報発信のコンテンツ作成と、展示室内でのインターネット利用環境の改善など設備の充実の検討が重要である。</p>
<p>各重点事業の目標と実施状況</p>
<p>4-1. 誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長</p> <p>【実施状況】インターネットを利用した展示解説補助ツール「ポケット学芸員」を導入し、その初期設定で利用できる文字による情報提供を試験的に行い、今後の使用範囲と実施計画について検討を行った。また、読み上げソフトと併用することで可能になる音声ガイドとしての利用ができるように、作業を進める計画を検討した。</p>
<p>4-2. 「観る」展示から「観る＋使う」展示への成長</p> <p>【実施状況】QRコード(二次元コード)を用いて琵琶湖博物館インターネットページで公開している「電子図鑑」や「おうちミュージアム」コンテンツ等へ接続することを一部展示で試験的に実施した。これらの方法を他の展示に設置していくために、今後は、展示を解説する補助ツールとして提示する情報およびインターネット上で公表するコンテンツを充実させていく必要がある。</p>
<p>4-3. 社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長</p> <p>【実施状況】C 展示室および水族展示室を中心に、2023 年までの短期的な更新計画、および 2030 年までの長期的な更新計画を収集した。また、全ての展示室で、小さな展示更新をいくつか実施し、あるいは準備した。</p>

【事業5の目標】より多くの人利用する博物館へ

実施目標：ICT を活用し「世界」を見据えた広報を展開して、より多くの人利用を実現します。また、双方向の広報によって常に博物館の社会的評価を情報収集し、博物館の魅力向上に役立てます

○内部評価

博物館ウェブページの構成を整理し、学習用サイトのアクセスを行いやすいようにし、動画サイトに展示等の動画を作成した。開館以来行っている来館者へのアンケート調査を継続して行っている。はじめて来館の割合は多いが、4回以上のリピーターも多く一定数いることがわかることなど現状把握をした（年報 p95 - 99）。キャッシュレス・チケットレスシステムの導入を行った。予約システムは、アンケート調査でやや不満が高まっている（年報 p98）ことから、利便性の高い博物館へは、現在の当館利用のシステムや社会インフラなどの状況を考えると、感染症対策の終了後には継続しない方がよい。

令和3年度は、ウェブページの構成整備により利用しやすいページづくりを実施し、計画の第一段階はできた。継続的アンケートの集計と考察を実施できたが、客観的評価手法の検討については、各事業における利用者の意見の集約と事業へのフィードバックの実施が課題であり、アンケート調査を継続しながら今後さらに進める必要がある。キャッシュレス導入などのインフラ整備は予定通り実施できた。

各重点事業の目標と実施状況

5-1. ICT を利用した琵琶湖の魅力とその入口としての博物館の紹介

【実施状況】 来館者用サイトと研究・学習用サイト(リサーチアーカイブス)を統合し、さらに「学ぶ・調べる」というタブでまとめて学習目的でのアクセス機会を増やす工夫をした。インターネット動画共有プラットフォームの YouTube に「びわこのちからチャンネル」を創設し、展示概要、各展示室の 360 度動画、研究紹介動画を 4 本アップした。

5-2. 双方向の広報や各種調査・評価による情報収集と事業への反映

【実施状況】 現在行っている博物館での調査方法(来館者アンケート・認知度調査等)を継続的に実施し、現状分析を行った。今後現状分析を踏まえて、調査・評価方針の検討を行う。

5-3. 来館しやすい環境の整備

【実施状況】 キャッシュレス・チケットレスシステムの導入が完了し 2 月 1 日より稼働した。予約システムについては確認作業などの人的なコストが大きいことからコロナ禍終了後には継続しないと判断した。

<p>【事業6の目標】博物館の活動を安定して継続する</p> <p>実施目標：老朽化した施設の改修や、災害に強い体制の確立を進めるとともに、活動基盤の安定のために、さまざまな支援を受ける仕組みづくりを進めます</p>
<p>○内部評価</p> <p>老朽化した施設の点検等から修繕や改修の必要箇所のリストアップを一部行ったが、今後の修繕計画を立てるにはいたっていない。危機管理マニュアルの整備を行い、館内での共有を進めた。活動支援制度については、感染症対策の状況下で行いながら試行を継続しているが、仕組みの検討・実施は今後の課題と捉えている。</p> <p>令和3年度は、施設管理についての過去の実績などの情報収集・整理が中心であった。マニュアル整備は情報共有、支援制度については社会状況もあり試行段階である。計画は順調といえるが、今後は施設の修繕の優先順位の検討や、社会状況をみながら支援の受入制度を模索するなど、継続的な活動が可能な仕組みづくりの検討を実施していく必要がある。</p>
<p>各重点事業の目標と実施状況</p>
<p>6-1. 老朽化した施設の改修と災害への備え</p> <p>【実施状況】点検や修繕等の実績に基づき要改修個所のリストアップを一部行ったが、優先度等の検討に必要な現況調査等が未着手。危機管理項目ごとに既存マニュアルを収集・整理し館内で共有できるようにした。</p>
<p>6-2. 安定した活動基盤を確保する仕組みづくり</p> <p>【実施状況】リニューアル後の支援の受入制度について試行を継続している段階である。2020年度に引き続き、コロナ禍の厳しい中で外部資金確保の取組は行っているものの、仕組みづくりにつなげるところまでは至っていないのが現状である。</p>